

中学校 国語 部会

部会長名 大任町立大任中学校 校長 荒尾 和幸

実践者名 大任町立大任中学校 主幹教諭 梶東 正一郎

1 研究主題

書くことに意欲を持って取り組むことができる書写学習指導の研究
～一人一台端末を活用した主体的・対話的な学習を通して～

2 主題設定の理由

昭和33年の学習指導要領の改訂で国語科の中に「書写」が位置づけられ、小学校学習指導要領では「毛筆による書写の学習は書くことの指導の一環として行うものであるから、その学習によって文字の筆順や字形をよく記憶するのに役立ち、文字や文を硬筆で書写することにも正しく、美しく書けるようにすることがたいせつである。」と記され、また中学校学習指導要領では「硬筆および毛筆による書写の指導においては、姿勢を正しくさせ、筆の持ち方や運び方に慣れさせ、字面を正したり、字形を整えたりして書くことに注意させるとともに、目的によって文字の大きさや位置を判断して書かせ、用具、書式などに慣れさせることを考慮する。」と記された。このように「書写」の学習は、整った字形、望ましい筆順で、平仮名や片仮名、漢字をそれぞれ書こうとする態度を育成すること、整った字形で文字を書くための原理・原則を見つけ、それを生活文字（ノート等に書く文字）に反映させていく態度を育成することや、目的によって文字の大きさや位置を判断して書くことを目的としている。その後66年、書写がねらう指導内容は大きく変わっていない。

書写の学習は試し書きと基準を比べ、生徒が自分のふだんの文字の書き方に課題を見つけ、その課題解決に向けて練習方法を学び、めあてに向かって取り組んでいく。つまり、この書写の学習の流れが「課題解決学習」そのものなのである。さらに平成29年の学習指導要領において、「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間力等」の涵養）」の三つの柱によって、学習目標や内容が再整理された。そして、子どもたちが、これらの力を確実に身に付けていけるように、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

以上のことから、書写の学習において「主体的・対話的で深い学び」「課題解決学習」を行うことは、本郡学校教育の充実を図る上で、大変意義深いと考える。

3 主題の意味

(1) 「書くことに意欲を持って取り組む」とは

これまで小学校3年次から楷書を学習してきた生徒にとって、「毛筆の書写学習をします。楷書に大切な筆遣いは・・・。」と言われても、新鮮味を感じることはなく、

繰り返されるだけの学習では意欲を欠いた態度になってしまう生徒もいる。

また、中学校書写では「文字を正しく整えて書く」ことを目指しているが、「原則を理解した上で様々な文字に生かすこと」も求められている。培った文字感覚を、日常の「書く」活動の各場面につなげていくのである。大筆による基本的な筆遣いを理解させ、その上で、日常では圧倒的に多い硬筆の場面に生かしていく態度を育てていくことが大切である。

この2点の問題を解決するために、毛筆の手本や自分の書いた字をICTを用いて分析、自己批正したり、他者の意見を聞いて自分の字を修正したりする学習は、新鮮味にあふれ、意欲をもって書写の学習に取り組む態度の育成ができるとともに、文字を正しく整え、原則を理解するうえで大変役立つものであると考えられる。

(2) 「一人一台端末を活用した主体的・対話的な学習」とは

① 一人一台端末の活用について

書写の教材文字は、「筆順と字形の関係を理解し、字形を整えて書くことができる」ようにすることを目標としている。例えば「天地」という教材ならば「一画めは長く書く」「二画めは短く書く」「三画目ははらいの方向に注意してゆっくりはらう」などといった書字のポイントがある。それを、教師が教えるのではなく、生徒が字を分析し、基準のどこを見ればよいのか、課題を見つけ、字を書くように指導していく。

② 主体的・対話的な学習について

今までの書写授業は「手本を見て書こう」という指示で学習させる形が取られてきた。繰り返し試して書く中で、字形やバランスといった美しく書くコツに気づいていく。しかしそれは個人の学習で得た力であって、他者へ広がっていくことはあまり期待できない。そこで自己批正で気づかせたいポイントについて思考させ、対話のなかで生徒自身が気づき、自分の課題を見つけることで、課題解決学習に向けて主体的に取り組ま始められるようにする。

4 研究の目標

書写活動のなかで一人一台端末を活用して手本を分析したり、自己批正をし他者と交流する活動を通して、生徒が主体的に取り組むことができる書写指導のあり方を究明する。

5 研究仮説

一人一台端末を活用して、字形や筆使い、文字の大きさや配列などを分析し書写活動に取り組み、自己批正や他者と交流することで、書写活動に意欲的に取り組み、主体的に学ぶ力を育成することができるであろう。

6 研究の計画(授業の計画)

(1) 単元(題材等)

「読みやすく書きやすく書くための楷書」(光村図書 中学書写一・二・三年)

(2) 単元 (題材等) の目標及び指導計画

単元	読みやすく書きやすく書きための楷書	総時数	6 時間	時期	7月～11月
単元の目標	<p>○点画の種類、漢字や仮名の筆使い、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書と楷書に調和する仮名で書いている。(知識及び技能)</p> <p>○書写の活動をするなかで、漢字や仮名の筆使いや字形、文字の大きさ、配列などを確かめている。(思考力、判断力、表現力等)</p> <p>○点画の種類、漢字や仮名の筆使い、文字の大きさ、配列などについて考え、学習課題に沿って書こうとしている。(学びに向かう力、人間性等)</p>				
次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(働・媛)	
1	2	点画の種類を確かめ、漢字の筆使いに注意して楷書で書くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の筆使いのポイントを確認する。 ・「学習の窓」を見て漢字の筆使いのポイントを確かめる。 ・「天地」「春風」の文字を書くときのポイントを各自で分析する。 ・漢字の筆使いを意識して毛筆で「天地」「春風」を書く。 ・相互批評・自己評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字を整えて書くには、「始筆・送筆・終筆のリズム」「筆圧」「点画のつながり」を意識することを理解させる。 ・オクリンクに送られた画像をもとに、文字を書くときのポイントを分析させ、意識して書くように指導する。 ・筆使いのポイントを意識しながら、毛筆で「天地」「春風」を書く。 ・書いた作品をオクリンクに送り、各自で分析した後、相互批評させる。 	
2	2	楷書に調和する仮名の筆使いや字形に注意して、整えて書くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「いろは歌」や平仮名の成立について理解する。 ・「結び」の書き方の違いや「曲がり」「折り返し」の筆使いを確かめる。 ・「学習の窓」を見て楷書に調和する仮名の筆使いと字形のポイントを確認する。 ・楷書に調和する仮名の筆使いと字形に注意して、筆ペンで「い 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を用いて「いろは歌」について、また平仮名の字源から、平仮名の成立について理解させる。 ・「平結び」「三角結び」の筆使いと字形の違いを理解させる。 ・「学習の窓」を確認し、楷書に調和する平仮名を書くときには、「やわらかい 	

		ろは歌」を書く。 ・自己評価をする。	筆使い」と「字形」を意識するとよいことを理解させる。 ・楷書に調和する仮名の筆使いや字形を意識して、「いろは歌」を筆ペンで書かせる。
3	1 本時	文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書と楷書に調和する仮名で書くことができる。 ・教科書P46の「夏の夜や・・・」を見て、どこを直すと読みやすくなるかを考え話し合う。 ・「学習の窓」を見て、文や文章を読みやすく書くための、文字の大きさや配列のポイントを確かめる。 ・用紙に合う文字の大きさや配列を意識して、筆ペンで俳句「夏の夜や・・・」を練習する。 ・相互批評・自己評価をする。	・オクリンクに送られたカードに、どこをどう直すかを記入させ、話し合わせる。 ・教科書P46の「学習の窓」を見て、文や文章を読みやすく書くために、文字の大きさ、配列、用紙に対する文字の大きさを意識すると良いことを理解させる。 ・手本に中心線を意識するために折ったり、文字の外形を書き込んだりすることで文字の大きさや配列のイメージをもたせる。 ・読みやすく書くポイントを意識して練習させる。
	1	・今までの学習を生かして、硬筆で作品を書くことができる。 ・硬筆のワークシートに鉛筆(シャープペンシル)を用いて練習する。 ・教科書の「学習の窓」を見て、既習のポイントを確かめる。 ・できた作品を自己批評する。	・ここまで習ってきたことを「学習の窓」を使って振り返り、硬筆でも同じように書けることを実感させる。

7 指導の実際

(1) 本時の指導観

導入では、めあてを確認する。その際、前時までの学習の積み重ねであることを伝え、本時の学習の見通しを持てるようにする。展開時では一人一台端末に送った、謝った手本を見て、どこを直すと読みやすくなるかを考え話し合う。話し合った内容を全員で確認し、直す

ポイントを認識するとともに、教科書を使って文や文章を読みやすく書くための、文字の大きさや配列のポイントを確かめる。それから実際に書く活動を仕組む。終末では自身が書いた文字の良さや課題に気づけるようにするため自己批正、交流する活動を設定する。

(2) 本時の主眼

文字の大小、字間、行の中心、行間など配列・配置を意識して、文章を書くことができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 書写に関する事項 (2) ア)

(3) 展開

	学習活動・内容	○指導上の留意点◆評価基準(方法)	配時
導入	1 本時のめあてを確認する	○学習内容を板書で共有し、学習の見通しをもたせる。	5
	文字の大きさと配列のポイントを確かめ、読みやすく書こう。		
展開	2 教科書P46の「夏の夜や・・・」を見て、どこを直すと読みやすくなるかを考え話し合う。	○オクリンクに送られたカードに、どこをどう直すかを記入させ、話し合わせる。 ○送られたカードを見ながら生徒の考えた直すポイントを確認する	10
	3 「学習の窓」を見て、文や文章を読みやすく書くための、文字の大きさや配列のポイントを確かめる。	○教科書P46の「学習の窓」を見て、文や文章を読みやすく書くために、文字の大きさ、配列、用紙に対する文字の大きさを意識すると良いことを理解させる。	5
		<p>読みやすく書くポイント</p> <p>①仮名は漢字よりも小さく書く</p> <p>②行の中心をそろえる</p> <p>③字間と行間をそろえる</p> <p>④用紙の上下左右に余白を取る</p> <p>⑤用紙にあった文字の大きさを考える。</p>	
		○読みやすく書くポイントを理解したうえで、教科書P46の「夏の夜や・・・」の直す箇所を確認させ、お手本を見て文字の大きさと配列を確認させる。	

	4用紙に合う文字の大きさや配列を意識して、筆ペンで俳句「夏の夜や・・・」を練習する。	<p>○半紙を4分の1にしたもの練習用紙とし、縦に置いて使用する。</p> <p>○お手本に中心線を意識するために折ったり、文字の外形を書き込んだりすることで文字の大きさや配列のイメージをもたせる。</p> <p>○読みやすく書くポイントを意識して練習させる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>◆文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書と楷書に調和する仮名で書いている【知】</p> <p>◆進んで用紙にあった文字の大きさ、配列などについて考え、学習課題に沿って小筆で俳句を書く【態】</p> </div>	25
終末	5自己批評、交流をする。	○個々に書いた作品を見て自己批評をし、他者と交流する。	5

8 研究のまとめ

(1) 導入の工夫

単元の導入では、「ただ練習して清書をするだけの書写」にならないように、「字を分析すること」【図1】を生徒に意識付けた。これは以前より紙媒体でもやってきたことだが、ほかの生徒と交流をする際に、比較することや交流

することが困難であったが、一人一台端末を使うことで、その困難さを取り除き、字を書くことに対する興味や関心をひくことができたと考え。また、教師から教えられるのではなく「自分たちで気づくこと」が、書写に対する苦手意識を軽減し、「書いてみよう」という気持ちになった。【写真1】



【図1】



【写真1】

(2) 本時について

本単元では、5時間目（6時間中）を公開業として行った。この時間では導入の場面

で、前時までの書写の時間を振り返りながら、同じように「字を分析し、課題を見つけ練習をする」ことを確認したのち、めあてである「文字の大きさと配列のポイントを確かめ、読みやすく書こう。」を提示し学習の見通しを立たせた。

展開では、端末に送られたカードに「どこがおかしいか」「どう直すべきか」を考えさせ、記入させたのち提出し、画面に提示しながら、課題の確認をした。【写真2】そうすることで、自分が気づけなかった点を、友達の視点から見つけることができ、自分の課題として練習に向き合うことができるようにした。さらに教科書の「学習の窓」を使ってポイントを確認する中で、自分や友達の



【写真2】

視点が正しかったことで自信を持つことができるとともに、さらなる学習の課題を確認することでよりポイントを意識して書く態度につなげることができた。今回の学習では筆ペンを用いて指導した。理由としては「①準備と片付けが楽であること。」「②筆の穂先が崩れにくいので、穂先の通り道を観察するのに適していること。」「③限られたスペースで多くの基本点画を確認することができること。」が挙げられる。小筆を使用して書くことが一番だと思うが、日常生活の中でも筆ペンの方が使う頻度も高く、これから先、生徒自身が触れる機会が多いのも筆ペンである。その点から学習道具として選択した。生徒の姿を見ても熱心に取り組む姿が見られ、授業後の感想にも「普段の生活でも使ってみたい」「筆ペンを使って作品を書いてみたい」「筆ペンだけでなくシャープペンシルやボールペンでも綺麗に書きたい」という意見が出ていた。終末の段階では自己批正をし、再び友達と交流する活動を仕組んだ。上手くできたことや次に対する課題や意欲的な意見も出ていた。【図②】

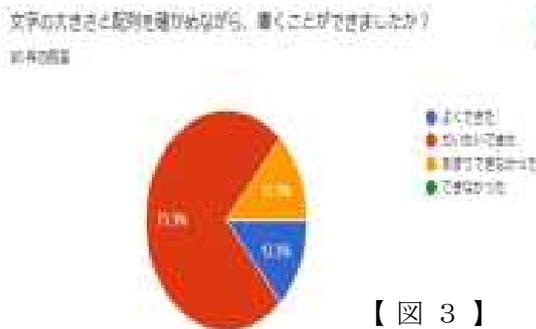


【図②】

9 成果と今後の課題

(成果)

- 授業後のアンケートで、1年生の国語科の内容である「字形、文字の大きさ、配列などについて理解して楷書で書く」ことができたと答えた生徒が全体の9割に近かったことから、学習の意義を達成できた。【図③】



【図3】

- 導入の段階で自分たちで課題を明確にしたことにより、単なる練習の時間になることなく、課題意識を持って学習に取り組む態度が見られた

- ICT 端末を取り入れた書写の学習は、今まで生徒が各自で行えなかった活動ができるようにしたり、字のバランスや字間などを確認することができたり大変有効だった。

(課題)

- 意欲的に取り組む態度や、主体的に学ぶ力を育てることはできたと感じられるが意欲の向上だけでなく、技能面での上達を図るための時間の確保をする必要がある。
- 今回は手探り状態で授業を計画していったが、生徒の課題を明確にし、正しく整った文字の書き方を学ばせ、手書き文字を大切にできる生徒の資質・能力を伸ばすために、指導の質を高める必要がある。そのためにも学習過程を見直し、これからも ICT 端末を効果的に活用していくべきだと考える。

◎ 参考文献

- 中学校学習指導要領解説 国語編（平成29年告示） 文部科学省
- 教育情報誌 学びのチカラ e-na!! 教育出版